

浜松市 新規就農者 インタビュー

— 次代の浜松農業を担う —



山本義晃さん・奈々絵さん

天竜区春野町 有機茶農家 1

鈴木啓祐さん

浜北区宮口 西洋野菜農家 3

中谷林太郎さん

西区雄踏町 トマト農家 5

西久保武揚さん

東区豊西町 セルリー農家 7

渥美隆裕さん

西区坪井町 たまねぎ農家 9

藤谷龍太さん

西区西鴨江町 花農家 . . . 1 1

磯貝将大さん

西区大山町 馬鈴薯農家 . . . 1 3

高嶋理代さん

西区湖東町 有機野菜農家 . . . 1 5

中野健太さん

北区都田町 みかん農家 . . . 1 7

中村勇貴さん

天竜区春野町 葉ねぎ農家 . . . 1 9

竹平尚裕さん

北区三ヶ日町 みかん農家 . . . 2 1

廣瀬明良さん

浜北区宮口 いちご農家 . . . 2 3

長谷川乾さん・実香さん

北区三ヶ日町三方原町 有機野菜農家 . . . 2 5

天竜区春野町

山本義晃さん・奈々絵さん

有機茶農家

オセアニアで知った有機栽培の魅力。
自分たちが口にしたいと思えるものを作り続けていきたい。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「農場での研修等を経て独立しましたが、独立して2年目になります。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「以前、4年間オセアニアに滞在していました。農場や牧場で働くファームステイという形で様々な地域を回っていましたが、その中でオーガニック（有機）栽培の魅力を知り、日本に帰って有機栽培をしたいと決めたのがきっかけです。その後、福井県の牧場で2年弱働かせてもらった後、天竜区振興課などの助けを借りて春野町砂川地区へ移住しました。砂川地区では、有機茶の栽培に地域一体で取り組んでおり、地域のみなさんの助けも借りながら就農することができました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「ファームステイの時も感じていたことですが、手をかけた分だけこたえてくれることです。また、高齢により続けられなくなった方の畑を耕作することで、地域の方々大変喜んでもらっています。移住から就農と大変お世話になっている地域のみなさんに、こういった形でお返しできることもうれしく感じています。」

Q. 「反対に、苦労した又は苦労しているところはどなたのところですか？」

A. 「お茶に関しては、有機栽培に対する消費者の方の関心がまだまだ薄いと感じています。近郊のオーガニック系イベントなどに出品するなど、PRに取り組んでいるところです。」

Q. 「ズバリ、山本さんにとって農業とは!？」

A. 「自分たちにとっては、有機栽培が農業です。自分たちが食べたいものを作って、食べて、心の潤う生活をしていきたいです。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「自分たちが口にしたいと思えるものを作り続けていきたいと思っています。そうしていく中で、砂川地区の有機茶を求めてこられるお客さんが増えてくれればうれしく思います。豊かな香りが特徴の砂川の有機茶を、ぜひ急須で味わってください。」



春野の茶

山間地特有のすがすがしい気候、森と清流、そして肥沃な大地の恵みを受け、古くからお茶の栽培が行われている。霧深い山の茶園で育まれるお茶はやさしくさわやかな香りと程よい渋みがあり、甘みの余韻があります。有機栽培によるお茶作りも盛ん。



浜北区宮口

鈴木啓祐さん

西洋野菜農家

就農のきっかけは“食への追及”。美味しい西洋野菜で食の楽しみをもっともっと広げたい。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「2年半ほど前に市の窓口を通じて農地をお借りし、就農しました。」

Q.「どんな農産物を作っていますか？」

A.「バターナッツなどの西洋かぼちゃ、トレビス・シュガーローフなどのチコリ類、ロングオクラ・赤オクラなど、一般的に玄人野菜と呼ばれている珍しい西洋野菜を中心に栽培しています。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「以前、静岡文化芸術大学近くで“S-TABLE”というカフェを営んでいました。元々野菜が好きだったことから野菜をメインにした料理を提供していたのですが、お客様に本当に納得のいく料理を提供するためには、自分で栽培した野菜を使いたいと感じていました。そんな中、お店でお客様が“農婚”というユニークな婚活イベントを定期的で開催してくれていて、それが自分にとって良い情報源となり、就農したいと思うようになりました。“食への追及”が就農を決意したきっかけとも言えると思います。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「自分はもともと非常に好奇心が強く、色んな新しいチャレンジを楽しめる性格だと思っています。野菜の栽培はもち

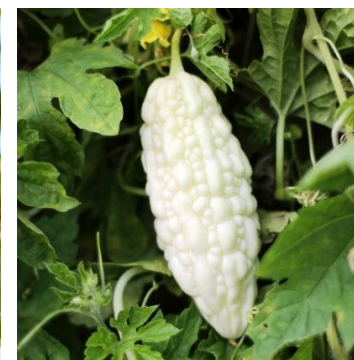
ろん思い通りにいかないことが多いのですが、なぜ失敗したのか？と頭を悩ませて、うまくいったときはすごくうれしいです。そして、また次の野菜は何を作ろうとか、このおいしい野菜をどうお客様に伝えようとか、そうやって色んなことを考え続けていられるのが自分にとっての楽しみです。そういう点は、元々カフェを経営していたという経験も下支えになっていると思います。」

Q. 「ズバリ、鈴木さんにとって農業とは!？」

A. 「自分にとって農業は天職だと思っています。料理するのも好きですし、食べるのも好きですし、その野菜を自分で育てられる。そういえば、仕事をしながら空を見たり、朝日を見たりということも、カフェを経営していた時にはなかなかなかったですね。自然の中で働くことは気持ちがいいです。人間にとって本来の形なのかもしれません。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「カフェは一旦閉めたのですが、自分の栽培した食材で料理を提供する農家レストランという形でまた OPEN したいというのが元々の構想です。栽培から料理まで一貫して自分が手掛けたものを提供するカフェを見晴らしの良いところで OPEN して、お客様に喜んでもらえたら一番うれしいですね。また、自分の栽培している西洋野菜はまだ知名度が低いのですが、当たり前のように食卓に並ぶようになることが夢です。おいしい西洋野菜が加われば、きっと今の料理のレパートリーが2倍・3倍と広がり、家庭で味わう食の楽しみも広がると思います。農協さんで開いている料理教室などで呼んでいただけることも多く、西洋野菜の使い方を提案させていただいていますが、こういった取り組みにも頑張っていきたいと思っています。」



玄人野菜

西洋かぼちゃやチコリ類など、西洋野菜を中心とした一般に出回ることの少ない珍しい野菜の総称。



西区雄踏町

中谷林太郎さん

トマト農家



地元・横浜から西へ西へと訪ね歩き、就農の地として選んだ浜松。構想どおりに栽培管理できたときが一番うれしい。

Q.「就農して何年目ですか？」

A.「昨年、とびあ浜松農協の協力でお借りできる農地を見つけることができ、就農しました。今年で2年目になります。」

Q.「どんな農産物を作っていますか？」

A.「りんかという種類のトマトを養液土耕栽培しています。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「以前はIT関係の企業に勤めていましたが、昔から物を作るのが好きで以前から農業に興味がありました。そんな折、池袋で開催された『新・農業人フェア』という就農に関する情報収集や相談ができるイベントに参加したことが、就農するきっかけとなりました。茨城県の農場で研修を積んだ後、地元の横浜から西へ西へと就農できる町を探して市役所や農協への相談を重ね、最終的に条件に合った浜松で就農しました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「全ての責任を自分が背負えるという点です。自然が相手ですからなかなかうまくいかないことも多いですが、その過程で失敗したことは、結果として自分のみにはね返ってくる。その点が企業で働いていた時とは大きく違うところですが、自分にとってはやりがいにつながっています。

そういう中で、自分の栽培管理の構想通りに最後までしっかりと手が回ったときが一番うれしい時ですね。また、それが

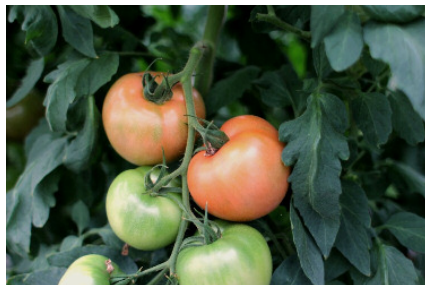
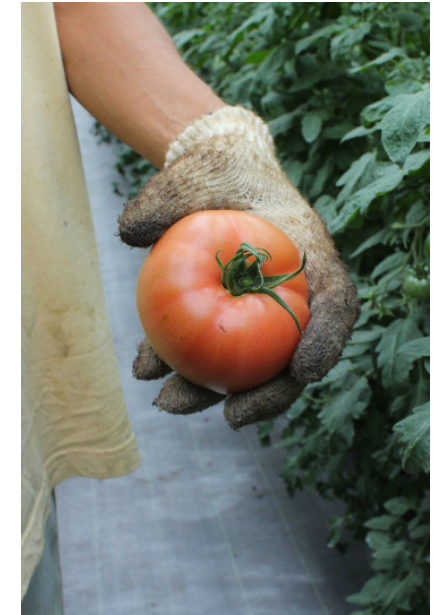
そのまま収入としての結果にもつながってきます。“一番うれしい時”というのであれば、預金通帳にお金が振り込まれた時が一番かもしれませんね（笑）」

Q. 「反対に、苦勞した又は苦勞しているところはどんなところですか？」

A. 「待たがきかない、というところ。こちらの事情で手が回らなくなった時にも、とにかくトマトは待ってはくれません。次々と熟してきてしまいます。収穫期が一番神経を使う時期です。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「とびあ浜松農協のトマトは品質に対する非常に厳しい選別を行っており、全国的にも高い評価をいただいている美味しいトマトです。とびあのトマトブランドが維持されるよう、これからもおいしいトマトづくりに努めていきたいと思ひます。」



トマト

浜松のトマト栽培の歴史は、大正6年に現在の芳川地区でメロン温室を利用して冬場に栽培したのが始まり。現在は、養液栽培方式により一年中栽培されているものが多い。東京や京阪神を中心に出荷されている。



東区豊西町

西久保武揚さん

セルリー農家

魅力は自分で手を掛けたものがしっかりと形になる充実感。
助けていただける地域みなさんにお返ししたい。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「3年目です。以前は東京で会社勤めをしており、店舗設計や商品プロデュースなどの仕事をしていました。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「故郷の宮崎で祖父母が農業を営んでいて、小さいころから見ていました。昔から農業に携わりたいという気持ちを持ちながら、一方で難しさも見ていたのですが、そんな中、東京都の池袋で開催された『新・農人フェア』という就農に関するイベントに参加したことがきっかけになりました。どうしても農業をしたい！という想いと、子育ての環境なども考えて一念発起したんです。ちょうど静岡県での受入れ制度が自分の環境に合い、地域の方々や農協の助けを借りて就農することができました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「自分で手を掛けたものがしっかりと形になっていく充実感ですね。もちろんうまくいかないこともあります。毎日試行錯誤しながら一連の作業を行っています。また、農家は一人ひとりが経営者でもあります。数字の面でもできる限り計画通り進むよう、色々と努力をしているつもりですが、そういう面も自分としては楽しみながらやれています。会社勤めの頃と比べて、家族との時間もとれるようになりましたね。」

Q. 「反対に、苦労した又は苦労しているところはどんなところですか？」

A. 「今のところはありません。農業がすごく好きで始めたことなので、非常に充実した毎日を送っています。ただ、職業として生計を立てていけないものなので、そういったプレッシャーは少なからずあります。特に最初はノウハウもなく初期投資も必要ですで大変でしたが、地域の農家の皆さんにサポートをいただきながら、ある程度しっかりとセルリーが作れるようになってきたと思っています。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「受け入れていただける地域・環境、助けていただける皆さんとのご縁をいただけたことが、自分はすごく幸運だったと感じています。「農業をしたい」と飛び込み、こうしたご縁で自分の希望を叶えられたのですが、一方で、受け入れていただいた皆さんからの期待や自分が果たさないといけない責務も感じています。全国に誇るとびあ浜松のセルリーブランドを維持できるよう、がんばっていきたいと思います。浜松のセルリーは本当においしいんです。実は、自分もここに来る前はセルリーを食べる機会はなく、クセがあって匂いもきつい…なんてイメージがあったのですが、初めて食べた時には、こんなにおいしいものがあるのか！とびっくりしました。毎年送っている故郷の宮崎の両親も大変喜んでます。うちは、昨晚もたくさん食べましたよ（笑）」



セルリー

全国でもトップクラスの生産量を誇る浜松市のセルリー栽培は、昭和18年に東区豊西地区から始まる。葉柄が肉厚・大株で臭みの少ないのが特徴で、冬から春にかけて関東地方を中心に全国へ出荷されている。

西区坪井町

渥美隆裕さん

たまねぎ農家

農業は“かんたんなコトがたくさんある集まり”
簡単だけど、覚えなるといけないことがたくさんある。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「とぴあ浜松農協の仲介で農地を借りてたまねぎ栽培をスタートし、今年で3年目になります。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「農業を始める前は9年間建設業の現場監督に携わってきたのですが、以前から自分で“経営”をしたいと思っていました。正直、最初は自ら経営できることならなんでも良いと思っていましたが、実際農業に携わってみて、衣食住すべてにつながっている農業は色々な可能性があると感じています。農業の技術については、オイスカ開発教育専門学校の“いきがい創造農園”というカリキュラムの中で学びました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「農業を中心にして、色々な可能性が見えることです。“加工”販売”や、“観光”にもつながりますよね。また、農業は様々な仕事の中でも大変だと言われていますが、難しいからこそやりがいがあると感じています。元々、転んでもタダでは起きない性格ですからね（笑）。苦労しているときほど、頭がまわるんです。今はある程度規模も大きくなり、従業員2名と時期に応じてパートさんを雇っていて、ピーク時には8人ほどで仕事をしています。最近では地域の他の農家さんから頼まれる作業も多くなり、育てていただいた地域に貢献できていることも、やりがいにつながっています。」

Q. 「反対に、苦労した又は苦労しているところはどんなところですか？」

A. 「ある程度の規模で生産しているため、現在従業員の方を2名と、随時パートさんを雇用しています。多い時は8人ほどを雇っていますが、従業員の方の管理がやはり一番頭を悩ませるところですね。従業員がレベルアップすれば、自然とその周りもレベルアップし、生産効率が上がっていきます。そういったことも意識していく大変さがあります。」

Q. 「ズバリ、渥美さんにとって農業とは!？」

A. 「自分がよく感じているのは、農業は“かんたんなコトがたくさんある集まり”だということです。簡単だけど、覚えなれないといけないことがたくさんある。実は、自分にとって農業をすることは、現場監督をしていた時と基本的には一緒なんです。現場の管理ですからね。目の前にあるたくさんの作業をどう采配するか、が自分にとっての農業経営だと思っています。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「観光農園というか、大規模な“テーマパーク”のような圃場が作れたら…、なんていうのが夢ですね。農家レストランがあったり、子どもたちが体験して楽しめるような場所があったり。農業を中心にすると、色々なことに夢を膨らませることができるんです。作物を作っているだけでは単なる作業になってしまうので、そういう夢をもっていきたいと思っています。日本一早く出荷される浜松の新玉ねぎは、辛みが少なく柔らかくて本当においしいです。ぜひ“生”で味わってください!」



たまねぎ

日本一早い出荷で知られる浜松のたまねぎは、篠原地区と中心に温暖な気候と砂地の特色を活かして栽培され、「新たまねぎ」として主に京浜市場へ出荷されている。辛みが少なく、みずみずしさが特徴。



西区西鴨江町

藤谷龍太さん

花農家

花の多い国って、豊かな国。そんなところも農業の魅力。
豊かな国づくりに少しでも貢献できるといい。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「父のあとを継いで就農し、今年で3年目になります。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「父は、スイートピーを中心とした花を主に生産する専業農家だったのですが、高齢になってきたこともあり、年々規模を縮小していました。僕は自動車整備関係の会社に5年程勤めていたのですが、そんな父のあとを継ぐことを決めて就農したんです。父の代ではお米を作っていた田んぼも、僕が就農する時にハウスを建て、花の圃場にしました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「がんばったらがんばただけの成果が出る、サボったらサボったなりの結果が出る。自分の仕事次第で、結果が自分に返ってくるのが農業です。そんなところが魅力ですね。また、花は種を播いてから日々育っていきませんが、毎日顔色が違うんです。花の顔が元気だと僕も嬉しくなって、圃場に行く朝の足取りが軽かったりしますね。もちろん逆のこともありますけど（笑）」

Q.「反対に、苦労した又は苦労しているところはどんなところですか？」

A.「最初は全てが手探りで、うまく育たない時には原因が分からず、農協の職員の方によく教えていただいていたいました。」

また農業機械もそれほど持っておらず、効率があがらずに苦労しましたが、3年経って今はだいぶ安定してきました。また、圃場を拡大したいと思っているのですが、比較的街場でやっていることもあり、なかなか拡大が難しい状況です。農地を集約して効率よく拡大していければ理想的ですね。」

Q. 「ズバリ、藤谷さんにとって農業とは!？」

A. 「農業従事者にとって、農業はこれから魅力ある産業だと自分は思っています。農業従事者人口が減っていく中で、僕たちが担う部分や期待される場所も大きくなっていくと感じています。また、僕のメインは花の生産ですが、花に囲まれた生活っていいですよね。花が好きの方はやはり多いです、うちに通ってくれているパートさんも、花を扱う仕事ということで喜んでくれている女性が多いです。花の多い国って、豊かな国だと思います。そんなところも農業の魅力。豊かな国づくりに少しでも貢献できたらいいですね。」

Q. 「最後に、これから先の夢と作られている農産物のPRを！」

A. 「『いいもの』を作り続けていきたいです。たくさんの人に喜ばれる、綺麗な花とおいしい野菜を作りつけていきたい。目標は、80歳まで現役で!あとは、今は小さな直売所をいづれしっかりとした大きな直売所にしたいと思っています。」



ランキュラス

春の鉢花として人気のある球根植物で、紙のように薄い花びらが幾重にも重なった姿が美しい。花色も豊富で、赤・ピンク・オレンジ・白・黄色など多種多様。



西区大山町

磯貝将大さん

馬鈴薯農家

思いやりをもって育てた作物は、自分にとって子供のような存在。多少身体がつらい時でも、できることは全部してあげたい。



Q.「就農して何年目ですか？」

A.「だいたい3年半ほどになります。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「就農する前、僕は会社勤めをしていましたが、週末は馬鈴薯を作る祖父を手伝う生活をしていました。小さい頃から農業を手伝っていたのですが、土いじりが好きですし、自分の作ったものでおいしいと喜んでもらえることが嬉しくて、やっぱり自分には農業が向いていると感じていました。そんな折、母校の静岡県立農林大学校の先生から、学内で職業訓練農業科をはじめるので受けてみてはどうかという勧めがあり、カリキュラムを受けた後、就農しました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「すごく単純なことなんですけど、“手を掛けたものがしっかりといいものになった時”が一番嬉しい時です。食べた人に喜んでもらえるように、自分なりにこだわってできる限りの手間をかけて作っているつもりですが、そんな思いができたものに反映された時がすごく嬉しいです。台風や悪天候などで色々な苦労をしても、いいものが収穫できた時には、それまでの苦労が吹っ飛びますね。」

Q.「ズバリ、磯貝さんにとって農業とは！？」

A.「農家の人はみんなそうだと思いますが、思い入れをもっ

て手をかけ作った作物は、自分にとって子どものような存在です。多少身体がつらい時でも、最後に出荷するところまでできることは全部してあげたい。そんな作業の連続が、自分にとっての農業ではないかと思います。」

Q. 「これから先の夢は？」

A. 「いつも技術の指導をしてくれている酒井一さんという方が僕の師匠なんですが、師匠に少しでも近づきたい。師匠に認めてもらえるだけのいいものを作ることが、恩返しになるのかなと思っています。そして、いずれは『この人が作ったものだったら大丈夫』と名前でも信頼してもらえるような農家になるのが目標です。また、産地として、三方原馬鈴薯のブランドをより一層広めていきたいと思っています。他の産地もがんばっている中でブランド力の競争は激しいものですが、これだけ品質の高い馬鈴薯は他にはないと思います。自分たちの力で、もっともっとブランド力を高めていきたいです。」

Q. 「最後に、作られている農産物のPRを！」

A. 「三方原馬鈴薯は、きれいな白い外観やほくほくした食感が売りですが、食べた時の鼻に抜ける風味がすごくいいのも特徴です。この風味の良さが、僕なりのおいしい馬鈴薯の条件だと感じているのですが、他の産地のものと比べても三方原馬鈴薯の風味は随一だと思います。ぜひ、塩だけをかけてシンプルな形で味わってください！」



三方原馬鈴薯

三方原台地の赤土と太陽の光をいっぱいを受けて育つ「三方原馬鈴薯」は、でんぷん質が豊富で肌の美しい高品質なばれいしょとして全国で高い評価を受けている。



西区湖東町

高嶋理代さん

有機野菜農家

お客さまに喜んでいただけるだけのいいものを作って、はじめて農業経営。お客さまの声をしっかり把握できるように。



Q.「どんな農産物を作っていますか？」

A.「さといも、しょうが、人参、カブ、小松菜、水菜、ブロッコリーなどを少量多品目で有機栽培しています。」

Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「小さなころから自然が大好きで、自然の中で仕事がしたいと思っていました。高校卒業後、静岡県立農林大学校で農業を学びましたが、非農家出身でしたので学ぶことはどれも新鮮で、楽しかったです。学校では農業法人への就職体験などもしましたが、有機農業に関心があったことや、自分で経営をしたいという想いが強かったことから、畑を借りて農業を始めました。私にとって転機になったのは、浜松市で有機農業に取り組んでおられる羽田農園さんに出会ったことです。羽田さんの農園とお人柄に惚れ込み、農業研修も受けさせていただいてこうして就農することができました。今でも週に1度農園に通って色々教えていただいています。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「達成感」の連続が私にとってのやりがいじゃないかと思います。毎日、その日その日の小さな目標を立てるんです。例えば『今日はキャベツの苗を200本植えるぞ！』なんていうふうに。もちろんやりきれない時もありますが、やり遂げた時の達成感は最高に気持ちがいい。また、そんな毎日の積み重ねで、最終的に自分の満足のいくものが収穫できた時の嬉しい気持ちは、本当に他に代えがたいものです。」

Q. 「反対に、苦勞した又は苦勞しているところはどんなところですか？」

A. 「とにかく雑草の処理には手間がかかっています。他にもたくさんの作業がある中、きれいな圃場を維持できるように日々がんばっています。私の場合は植物性の堆肥のみを使っているのですが、なかなか手に入らないものなので山でススキを刈りにいくなど自分で調達していて、その部分もすごく大変ですね。また、年間を通して有機野菜 BOX の個別宅配をしているのですが、自分なりにとてもプレッシャーを感じながらやっています。その時採れた旬の野菜を詰めてお届けするのですが、お客様と顔を合わせてお届けできる分、良い点も悪い点もダイレクトにお声をいただくので、収穫物の出来や詰める野菜の選択など毎回かなり神経を使いながらやらせてもらっています。」

Q. 「ズバリ、高嶋さんによって農業とは？」

A. 「仕事”ですね。自然や農業が好きですが、自分の好きなものを作っているだけでは生計が成り立ちません。お客様に喜んでいただけるだけのいいものを作って、それを買っていただけて、はじめて農業経営になります。お客様の欲しがっているものや、どんなものが良かったか、などをしっかりと把握できるように努力しているつもりです。」

Q. 「最後に、作られている農産物のPRを！」

A. 「地主さんからお借りしている畑は60年間無農薬の畑です。土づくりもしっかりとしているので、ここでできる野菜はとておいしいです。たくさんの種類の有機野菜があるのでぜひ味わってみてください！」



環境保全型農業

農業の持つ物質循環機能を生かし、生産性との調和に留意しつつ、土づくり等を通じて、化学肥料、農薬の使用等による環境負荷の軽減に配慮した持続的な農業。



北区都田町

中野健太さん

みかん農家

挑戦することが大切だと思っています。怖いけど、向かっていかないと目標に近づけないですから。それに失敗したら、次の人がより良い方法でチャレンジできますよね。



Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「元々は製造関係の仕事をしていましたが同じ作業の繰り返しが多く、物足りなさを感じていました。そんな中で、自らいろいろなことができる農業の世界に入りたいと一念発起したのがきっかけです。いろいろと調べる中で、静岡県が行っている新規就農者の研修受入制度を活用させていただきました。いくつかの農家さんを回った中で、果樹の世界が面白いと感じ、浜北区宮口のスズキ果物農園さんで1年半の研修を受け、こうして就農することができました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「農業の世界に入った頃は、いくらでも上を目指せる！ということが魅力だと感じていました。今はそれに加え、若い就農者にいろいろと教えてあげられることもやりがいになっています。所属している丸浜柑橘農業協同組合連合会では、自分の後に12人ほど若い農業者が就農しています。そんなみんなにアドバイスしたり、また逆に新しいことを教えてもらったり。」

それから、僕は収穫の時よりも、剪定したり防除したりという管理作業の方が好きなんです。良いものを作るまでの栽培管理がやっぱり一番大切で、何をどうしたらどうなるんだろうと頭を悩ませていることが、自分の性分にあっていると思います。失敗してもOK。農業は、そうやっていろいろとチャレンジできることが魅力だと思います。失敗は直に自分に返ってきますけど（笑）」

Q. 「反対に、苦勞した又は苦勞しているところはどんなところですか？」

A. 「一番の苦勞というと、人を集めることですね。収穫の時はほんとにたくさんの人手が必要で、知人づてにお願いをしているんですがこの農家さんも足りていないのが現状です。また、畑を貸してもらおうということも、なかなか簡単ではありません。この人なら貸しても良いと、地主さんに信頼していただけるような農業者としての自分の姿が大切だと思います。

そのほかは…、先ほどの話と逆説的になるんですが、正直言えばチャレンジすることはすごく怖いんです。苦勞という点では、それも大きいですね。ただ、挑戦して、失敗することが大切だと思っています。怖いけど向かって行かないと、目標に近づけないですから。それに失敗したら、次の人にそれを伝えれば、その子がより良い方法でチャレンジできますよね。」

Q. 「最後に、これから先の夢を！」

A. 「大きな平屋の家を建てるのが夢です！45歳で家を建てる、70歳まで働いてそのあとは思いっきり遊ぶ、というのが僕の人生設計なんです（笑）。農業に関しても、今は借り物ばかりなので少しずつ自分のものを揃えて、財にしていきたいですね。より良いものを作るように技術を磨きながら、もっともっと栽培の面積を広げていきたいと思っています。そうしていく中で、自分を育ててくれた周りの方々にも恩返しできれば嬉しいです。今は、県などでも就農をサポートしてくれる制度が充実していると思います。たくさんの新しい人たちが農業の世界に入ってきてくれるといいですね。そんな人たちと一緒に盛り上げていけるのが、すごく楽しみです。」



みかん

冬を代表する日本の果物「みかん」は、鹿児島県が原産とされ、明治以降浜松市でも盛んに栽培されるようになった。奥浜名湖の三ヶ日、細江、引佐地区を中心に、都田地区や浜北地区など広い範囲で栽培が行われている。



天竜区春野町

中村勇貴さん

葉ねぎ農家

僕にとっての根本は、生まれ育ったこの町が大好きなこと。
そして、ここで働ける幸せです。



Q.「就農したきっかけ（動機）を教えてください」

A.「僕は元々春野育ちですが、大学進学の際に上京し、その後8年東京で暮らしました。大学院を修了後は東京のベンチャー企業に勤め、小規模な会社だったことから様々な業務を任せてもらってはいたのですが、そういった生活の中でやはり自分は春野が大好きで、ここに戻って暮らしたいという気持ちが大きくなったんです。こちらで勤め人になることも考えましたが、どうせ春野に帰るなら農業経営に携わりたいと、就農を決めました。地元の農家さんや県のサポートなどもあり、農業研修を経て、最終的に農業生産法人アトップさんの助けを借り葉ねぎの生産をしていくことになりました。」

Q.「農業の魅力や、やりがいを感じる場所は？」

A.「一つは、やはり自分のやった仕事そのまま結果につながるのだと思います。自然には逆らえないですし、結果が出ないこともあります。そんなギャンブル的な面も少し自分の性分にあってるかもしれません（笑）全て自己責任できますよね。また、僕にとっての根本は、生まれ育ったこの町が大好きなこと、そしてここで働ける幸せです。地域の方々が見てくれていて、支えてくれて、声を掛けあえる暮らしはとても豊かです。葉ねぎって、出荷までに色々必要な作業があって人手が必要なんです。なので、周りのおじいちゃんやおばあちゃんにパートをお願いするんですが、みんなすごく喜んでくれていて。仕事ひとつで、生活の張り合いが出る

みたいです。僕の農業が大きくなっていけば、お願いできる仕事もそれだけ多くなっていきます。そんな風に春野に少しでも、何かを返していければと思っています。」

Q.「反対に、苦勞した又は苦勞しているところはどんなところですか？」

A.「農業の経験がなく就農しましたから、特に最初のうちは知識不足に悩まされました。いろいろな方からのアドバイスを吸収しながら、自分なりのやり方を模索している最中ですが、劣等感を感じる時はありますね。今は、遠州中央農業協同組合の営農指導員の方からいろいろと教わっていて、こうして頼れる方が周りにもいることも幸せなことです。」

Q.「最後に、これから先の夢を！」

A.「自分が頑張ることで、春野の町をもっともっと元気にしたいと思っています。今は春野から若い世代が減ってきてしまっていて、自分の子どもの世代のことを考えたりすると余計寂しさを感じています。実は、大学では環境や都市デザインといった分野を専攻していたのですが、そういった視点で見ても、春野という町は本当に豊かな環境だと感じています。山、川、お茶や、ここに住んでいる人と暮らし。最近ではジビエなども人気がありますよね。今、市内の大学生との農業交流を行っているのですが、学生さんたちには、『畑仕事だけでなくより広い視野で魅力を感じて』と、いつも伝えています。そんな春野の豊かな資源で、これからのこの町を盛り上げていきたいと思っています。」



葉ねぎ

浜松市では、1970年代後半から葉ねぎが注目されはじめ、計画的な生産出荷が可能なることから栽培面積が拡大し、現在では大規模で起業的な経営が行われている。薬味や汁物、丼物などさまざまな料理に使われる。

